



■文=小山田桐子/榎D&N ■イラスト=大久保ヤマト
※この物語は史実を基に、一部フィクションで作成されています。
【問】市観光課観光推進係 (☎ 77・8563)

立花宗茂 と閻千代 ドラマプロット

—こんな大河ドラマが見てみたい—
第28話

自ら最前線に立つ宗茂
その圧倒的なオーラに
敵も味方も驚愕！

宗茂は後方で待機するよう命じられるが、戦いの行方が気になって、夜も眠れない。前線で指揮を執ってきた宗茂にとって、後方で結果を待つしかないというのはもどかしい。

ソワソワウロウロ落ち着かない宗茂。松平信綱は仕方なく、出陣を促す。

宗茂参戦を聞いた家臣たち

は慌てふためく。

何せ、71歳の老齢。しかも、將軍のお気に入り。何かあったらどうするのだろうか。いや、何かあるに決まっている、と青ざめる家臣たち。

十時撰津を従え、宗茂が戦場に姿を現した。

あたりを払う威風。

おじいちゃん2人とは思えない堂々たる英雄のオーラに、家臣たちはどよめき、思わず道を開ける。

形だけでも戦場に顔を出すだけで満足するだろうという



信綱の思惑は完全に外れた。宗茂は最前線に立ち、兵を鼓舞しつづける。どこにそんなスタミナがあるのかと思うような活躍だった。生きる伝説の存在を間近に見た家臣たちの士気は否が応にも上がり、討伐軍は籠城する城を果敢に攻め続ける。そして、ついに城を攻め落とし、2カ月続いた膠着状態にピリオドを打った。

格の違いを見せつけられ落ち込む信綱。しかし、宗茂は妥協を重ねながらも、バラバラな軍を何カ月もたせた信綱の手腕を評価する。これからの世はきつと、信綱のような才こそが大事なのだと。家光の直々の依頼を見事に果たし、江戸に戻った宗茂。戦場で見せた鋭い殺気が嘘のように、穏やかな笑顔でふるまわれた茶を口にする。

～人物紹介～

京都時代を支えた人物①

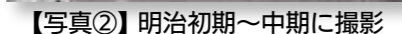
蘭溪和尚 (1570～1658年)



大徳寺の僧、宗茂にとっての茶の湯の師。純粹に茶の湯の嗜みを深めることだけを考え、蘭溪和尚の教えを乞う宗茂。蘭溪和尚は宗茂の愚直で澄んだ人柄に深く惹かれ、京での浪人生活を支えるように。



【写真①】戊辰戦争中に撮影



【写真②】明治初期～中期に撮影

今回は、山崎泰子さん(越谷市)から8月に寄贈を受けた旧柳河藩士「加園家旧蔵史料」(全83点)の中のガラス板写真を紹介します。この加園家の幕末の当主は之直。息子に之温、之重、武、数世、環、そして娘のみねがいました。

写真①は、草履を履き、刀を持ち、鬘を結っています。服装は洋装です。このような出で立ちが、戊辰戦争時に撮影された写真の特徴です。

この写真で注目すべきは、背景の壁に「我 君為 御鎮撫閣 東依 御下向従于役(我が君、関東を御鎮撫の爲め、御下向により、役に従う)」という紙が張られているところです。

慶応4(1868)年1月に始まった戊辰戦争当初、柳河藩は神戸警備を担当し、藩主立花鑑寛は大坂へ上っていました。その後、柳河藩は会津藩追討の第2軍として、7月の磐城平城攻撃などに加わっています。

これとは別に、藩主鑑寛には「関東鎮撫」の命令が出されました。このため、同年6月に新たに柳川から軍隊が派遣され、大坂で鑑寛と合流して、江戸へ出発します。背景の壁紙の文字が

柳川古文書館館長 田淵義樹

刀からそろばんへ

ら推測すると、この写真①の人物は、この時に江戸へ上ったと思われまふ。そうなる、磐城平城攻撃の軍にはいなかったこととなります。「加園家旧蔵史料」には、明治元年11月に、立花鑑寛から次男之重宛てに出された磐城平城攻撃の感状が遺されていますので、写真①の人物は、之重の兄弟の誰かでしょうか。一方、写真①より少し後、明治に入って撮影されたと思われるのが写真②です。手には、そろばんと帳面、髪型も写真①とは違います。武士たちは戦闘集団としての役割が終わり、家禄の支給が廃止されました。その代わりに士族救済の施策が行われ、柳川では興産義社(缶詰・織物・足袋製造業)、紫瀉社(製糸業)という会社が設立されました。加園家のみねは足袋縫工として興産義社で働いていました。

写真①と②を比べると、当時の士族を取り巻く環境がいかに大きく変化したのかが見てとれます。現在柳川古文書館で開催中の企画展「柳川の自由民権運動」では、みねが作った縫製ひな方などを展示しています。ぜひ、ご来館ください。

市史編集委員会では、数年後に写真を中心とした本を刊行する予定です。現在さまざまな写真や絵はがきなどを集めています。隔月1日号に、同委員会で集めた写真を紹介します。

【問】市生涯学習課市史編さん係 (☎ 72・1275)